センス・オブ・プロポーション

樋野興夫著
いい覚悟で生きるより

悩んだとき、迷ったときは、何が大切で、
何がどうでもいいことかを決めるセンスを磨くことが大切です。

「センス・オブ・プロポーション」という言葉を残したのは、新渡戸稲造です。 イギリス人やアメリカ人は、何が大きいことで、何が小さいことかを見きわめる「センス」を持っている。ところが、日本人にはそれが欠けているというのです。重要なことと些細なことを混同して、どうでもいいことの周囲をうろつくばかりで、核心をつかめないという手厳しい評価です。

明治維新後、近代の日本人に対しての評価とはいえ、大所高所から物事が見られない傾向は、現在にも続いているように思います。

新渡戸は、重大な問題は複雑なものだけれど、核心をつかんでいれば、おのずからどんなことでも解決の道が見出せる、とも言っています。のちに、私がアメリカ留学で出会った師、 クヌッドソン博士からいただいた言葉も新渡戸の言葉と共通するものでした。

「本はひとつであり、本は多岐に分かれる。末梢のひとつひとつを追いかけていっても、本を見失えば、いたずらに疲れるばかり。根本に目を据える必要がある」

がん哲学外来を始めたとき、私も「センス・オブ・プロポーション」を自問自答しました。誰のために、なんのために、がん哲学外来は開かれるべきなのか、と。

もちろん、その答えは、患者さんとその家族のために、じっくり悩みを直に聞き、解消できる道を一緒に探すためにほかなりません。そのためには、気軽に予約ができて、お茶など飲みながらリラックスした雰囲気で、面談は無料が望ましいと考えました。

「がん哲学外来」を継続するに当たり、所属する大学や病院という「陣営」の外へ出て開設することを決断したのもそのためでした。

こうした流れの中、複数の大学病院のお膝元で、医療機関が集まるメディカルタウンとも言える東京・お茶の水で「がん哲学外来メディカルカフェ」が開設されることになりました。

カフェはがん哲学外来と同様、お茶を飲みながら、ゆったりとした雰囲気で、 患者さんや家族、医療者が同一の平面で対話する場です。がん哲学外来のグループ版といったところでしょうか。がん哲学外来を 2 階部分とすると、メディカルカフェは 1 階か玄関先のイメージです。

いずれにしても、がん哲学外来と同じように対話を中心として、患者さんをはじめ、がんとともに生きる方々をサポートする場です。医療機関に限らず現在は全国約 60 か所にも広がり、さまざまなところで開催されています。

「センス・オブ・プロポーション」はまた、患者さんにもメディカルカフェのスタッフにもよくかける言葉です。悩んだとき、迷ったときは、何が大切で、 何がどうでもいいことかを自分で決めること。そして、すべきことがわかれば、手順を踏んで本気でやることです。

「悩める患者さんのために開かれていること」を核に考え続けているので、全国に広がったがん哲学外来カフェの運営はすっきりしています。基本は、その地域ごとで運営しているスタッフ、患者さんと医療者にまかせているので、私抜きでカフェは頻繁に開催されています。私は講演などで呼ばれたときに行き、 カフェで参加者が対話を楽しんでいる間、別室で「がん哲学外来」に当たるという姿勢で、それ以上の関与はしないでいます。

それだけ、がん哲学外来カフェはゆるやかな組織で、そのカフェごとのやり方があっていいのです。私ひとりが統括するよりは、より多彩な活動ができることは言うまでもありません。

人にまかせられることはまかす。これも胆に銘じておきたいことです。

ところで、カフェのスタッフはときに、カフェの運営とはあまり関係のない、 誰それからこんな批判を受けたとか、人間関係についての悩みを吐露する人もいます。また、患者さんも病気とは関係のない、近所の人が私をこんな目で見る、私を批判している、といったたぐいの悩みを訴えることがあります。

そんなとき、私のアドバイスは決まっています。

「ノミ、シラミが肩をちくりと刺すごとし」

つまり、ノミやシラミに刺されたぐらいの些末なことでしかないのです、だからほっとけ、と。勝海舟の言葉を新渡戸が引用したものですが、「センス・ オブ・プロポーション」のエッセンスをユーモアを持って表わしていると思います。